

重点取組分野	令和 4 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
授業改善	①学習マークやデジタルタイマー、ミニ黒板などを活用し、ユニバーサルデザインの授業を行い、どの子どもも基礎・基本をしっかり定着できるようにする。タブレットなどのICT機器を活用して効率的に学習を進める。②資質能力を高めるための指導と評価の一体化を図りながら授業づくり、改善を行っていく。③重点研究では、「主体的に学習に取り組める子どもの育成」を研究主題とし、教職員全員で授業を見合い、授業の進め方を話し合い、研究し、授業に生かしていく。	学習マークやデジタルタイマー、ミニ黒板などを活用し、ユニバーサルデザインの授業を行い、どの子どもも基礎・基本をしっかり定着できるようにした。また、タブレットなどのICT機器の活用をいろいろな学習で取り入れ進めた。個々の資質・能力を高めるための指導と評価の一体化を図りながら授業づくりをし、改善を行った。さらに重点研究では、「主体的に学習に取り組める子どもの育成」を研究主題とし、教職員全体で授業を見合い、授業の進め方を話し合い、研究を通し授業に生かすことができた。	B
道徳教育	①学校や地域で、自ら進んで気持ちのよい挨拶ができるようにしていく。また、SSTの視点を取り入れた指導を積み重ねることで、思いやりの心を育み、自他を大切にしていこうとする態度を育て道徳的な判断力を養っていく。②年間を通した異学年交流を行い、ねらいを明確にした全校遠足など縦割り(ふれあいグループ)での活動を行うことによって実践意欲と態度などの道徳性を養っていく。	学校や地域で、自ら進んで気持ちのよい挨拶することを年間生活目標に掲げ、取組内容を各クラス・個人で毎月振り返りをした。また自他を大切にしていこうとする態度が育ち道徳的な判断力がついた。さらに、年間を通した異学年交流を行い、ねらいを明確にした全校遠足など縦割り(ふれあいグループ)での活動を行うことによって、他者を思いやり優しい声かけをしたりすることができるようになった。	B
健康教育	①体育朝会(ラジオ体操、ペース走など)や体育集会(大縄跳び)を実施し、運動を習慣化するきっかけとする。②体育部や体育委員会から、外遊びに関する呼びかけを行うとともに、養護教諭による保健指導、衛生指導などを併せて行い、心身ともに健やかな児童の育成を図る。③体育の安全面や技能面の職員研修を行い、指導者の安全への意識や授業力を高め、体育科学習で児童に還元していく。	体育朝会(ラジオ体操、ペース走など)や体育集会(大縄跳び)を実施し、個々の運動を習慣化できた。また、定期的に児童に外遊びに関する呼びかけ(リズムジャンプなど)を行ったり、保健指導や衛生指導などを併せて行い、心身ともに健やかな児童の育成に努めた。さらに、体育の安全面の職員研修を行い、指導者の安全への意識や授業力を高め、体育科学習の様々な場面において児童に還元することができた。	B
外国語教育	①外国語活動・外国語科では、コミュニケーションを図る資質・能力を育成するために学習と指導の充実を図る。さらに英語を通して、自己決定力・自己表現力の向上を目指す。②国際理解教室では日本とシンガポールの文化や習慣などの違いを学び、異文化理解を推進していく。③英語村では、AET・教師、異学年との交流を通し、様々な思いや考えをもった人々との関わりの中で多様性を尊重し、協働・共生の意識を育てていく。	外国語活動・外国語科の授業では、コミュニケーションを図る資質・能力を育成するために学習と指導の充実を図りながら、英語を通して、自己決定力・自己表現力の向上を目指し取組むことができた。また、国際理解教室では日本とシンガポールの文化や習慣などの違いを学び、異文化理解の推進を計画的に行った。さらに、英語村では、AET・教師・英語サポーター・異学年との交流を通し、様々な思いや考えをもった人々との関わりの中で多様性を尊重し、協働・共生の意識を育むことができた。	A
いじめへの対応	①いじめは重大な人権侵害という認識を学校全体で共有し、いじめの未然防止、早期発見、早期解決に努める。②いじめ防止対策委員会を毎月、開催するとともに、児童会の取組や子ども会議との関連を図った有機的な取組を行う。③スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーを中心として、外部機関とも連携を図り、様々な角度や視点からいじめ防止に向けた取組につなげていく。	いじめは重大な人権侵害という認識を児童と教師で共有することや教員によるいじめ防止対策委員会を毎月定期的に開催した。また、児童会の取組や子ども会議との関連を図り、いじめの早期発見、早期解決と未然防止に努めた。そして、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーを中心として、外部機関とも連携を図りながら、様々な角度や視点からいじめ防止に向けた取組につなげた。	A
人材育成・組織運営(働き方)	①キャリアステージにおける人材育成指標に応じた自主研修の推進や校外研修に参加しやすい環境を整える。また校内OJTやメンターチーム等の活動推進を通し、教職員一人ひとりの力量を高め、学び続ける教師を学校全体で育成していく。②ICTを効果的に活用しながら風通しのよい組織をつくり、協働的で機動力のあるチーム齋藤分小学校を構築していく。③ワークライフバランスを十分にとり、めりはりのある働き方ができるような意識を教職員全体が常にもつようにする。	キャリアステージにおける人材育成指標に応じた自主研修の推進や校外研修に参加しやすい環境を整えることに努めた。また校内OJTやメンターチーム等の活動推進を通し、教職員一人ひとりの力量を高め、学び続ける教師を学校全体で育成した。さらに、ICTを効果的に活用しながら風通しのよい組織をつくり、協働的で機動力のあるチーム齋藤分小学校を構築していくように年間を通して努めた。さらにワークライフバランスを十分にとり、めりはりのある働き方ができるような意識を教職員全体が常にもつように意識した。	A
特別支援教育	①一人ひとりの子どもの実態を把握し、少人数指導や特別支援教室の取り組みを活用し、個の特性に応じたきめ細やかな指導ができるようにする。②保護者の考えや思いに耳を傾けながら、学校カウンセラーやスクールソーシャルワーカー、療育センターなどの関係機関と連携をし、支援の在り方を振り返り、改善するように努める。	一人ひとりの子どもの実態を把握し、少人数指導や特別支援教室の取り組みを活用し、個の特性に応じたきめ細やかな指導ができるように努めた。また、保護者の考えや思いに耳を傾けながら、学校カウンセラーやスクールソーシャルワーカー、療育センターなどの関係機関と連携をし、支援の在り方を振り返り、改善するように努めた。	B
児童指導・児童支援	①職員会議や打ち合わせでの状況共有だけでなく、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーを活用しながらケース会議などの場で子どもたちの状況を確認し、情報を共有するとともに、指導の方向性や外部機関との連携について協議するようにする。②齋藤分小学校スタンダードを基本に、どの教職員も同じスタンスで児童指導にあたるように共通理解をしていく。	毎月の職員会議での児童の様子を共有するだけでなく、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーを活用しながらケース会議などの場で児童の状況を確認し、情報を学校全体で共有するとともに、指導の方向性や外部機関との連携について協議するように努めた。児童が迷わないように齋藤分小学校スタンダードを基本に、どの教職員も同じスタンスで児童指導にあたるように共通理解を年間を通して進めた。	A

<p>地域連携 学校運営協議会</p>	<p>①地域の人的・物的資源を活かした単元づくりや学校環境整備を行い、神奈川大学や地域ケアプラザなど地域の各機関と連携し、教育活動に可能な範囲で参加して頂く機会を年間を通して教育課程の中に設定していく。②保護者・地域住民・地域学校協働活動推進委員等と連携・協働しながら、地域に開かれ・支えられ・信頼される学校づくりを目指していく。そのために、授業参観、交流給食の実施や、ホームページ等に学校の取組について年間を通して紹介するなど積極的な情報発信を行っていく。</p>	<p>地域の人的・物的資源を活かした単元づくりや学校環境整備を行い、神奈川大学や地域ケアプラザなど地域の各機関と連携し、教育活動に可能な範囲で参加して頂く機会を年間を通して教育課程の中に設定しコロナ禍の中、確実に実施した。また、保護者・地域住民・地域学校協働活動推進委員等と連携・協働しながら、地域に開かれ・支えられ・信頼される学校づくりを目指し、授業参観の実施やホームページ等に学校の取組について年間を通して紹介し、積極的な情報発信に取組んだ。</p>	<p>A</p>
<p>信頼される 学校づくり</p>	<p>①学校便り、懇談会や学校説明会等において積極的な情報発信や安全な環境整備に努め、児童・保護者・地域にとって魅力ある学校づくりに、教職員一丸となって取り組む。②学校の実情に関してアカウンタビリティを十分に果していくように常に留意する。③職員や保護者による学校評価や児童アンケートを通し、教育活動が児童の育成や変容にどう表れたのか、また保護者がどう受け止めたのか分析し、それを基にアクションプランを作成し、よりよい教育活動の推進に繋げていく。</p>	<p>学校便り、懇談会や学校説明会等において積極的な情報発信や安全な環境整備に努め、児童・保護者・地域にとって魅力ある学校づくりに、教職員一丸となって取り組んだ。また、学校の実情に関してアカウンタビリティを十分に果していくように常に留意した。職員や保護者による学校評価や児童アンケートを通し、教育活動が児童の育成や変容にどう表れたのか、また保護者がどう受け止めたのかを分析し、それを基にアクションプランを作成し、よりよい教育活動の推進に繋げた。</p>	<p>B</p>
<p>ブロック内 評価後の 気付き</p>	<p>本年度はコロナ禍の中であったが、六角橋中学校ブロックで行っていた様々な取組も、概ね従来通り行うことが出来た。特にこの2年間見送りになっていた小中合同授業研究会において、実際の授業を参観しながら「9年間で育成を目指す子ども像や資質・能力」について共通理解をすることができた意義は大きい。各教科・領域における指導事項や内容の繋がりを意識しながら、今後より一層カリキュラム・マネジメントを促進していきたい。また、教務主任会では、行事の日程調整の他にも情報発信等の仕方について各校と意見交換を行った。次年度も、より充実した小中交流・連携を行えるように、各校と工夫しながら連携を推進していきたい。</p>		
<p>学校関係者 評価</p>	<p>学校運営協議会の委員の皆様からは、小規模校のよさを活かし、異学年交流の促進や教職員全体でこれからも児童をしっかりと見ていって欲しいなどのご意見をいただいた。また、学校評価アンケートでは、どの項目も高い評価を頂いた。約3年に及ぶコロナ禍の中、児童にとって充実した教育活動になるよう議論を重ねながら、教職員一丸となって取り組んだ結果だと考える。また、毎月学校便りやホームページ等で児童の様子を発信し、授業参観などで日頃の児童の様子を見て頂く機会を設け、保護者・地域の方から信頼される学校づくりに努めたことも、このような評価に繋がったと考える。</p>		
<p>中期取組 目標 振り返り</p>	<p>コロナ禍3年目となった令和4年度であったが、学校行事や感染拡大防止を意識した授業形態も、ほぼ以前の状態を回復し、充実した教育活動を行うことのできた1年であったと今振り返っている。「一人ひとりの子どもの心に配慮した学校づくり」を目指し、いじめの未然防止やICT端末を使った教育活動の充実から、教職員の働き方改革に至るまで、概ね当初目標は達成できたものと認識している。次年度も引き続き、小規模校であることのメリットを最大限に生かしつつ、協働的な学びや個別最適な学びの更なる充実を図っていければと考えているところである。</p>		